

平成 23 年 8 月 20 日

マラヤ大学サマープログラム参加報告書

国際開発工学科四年

タニ ウン

08-15498

TEL: 080-6567-5612

E-mail: gu.y.ac@m.titech.ac.jp

派遣期間

平成 23 年 7 月 3 日ー平成 23 年 7 月 28 日



1. はじめに

私は、今回、AOTULEのサマープログラムへの機会を得て、7月3日から7月28日までの約一ヶ月の日程で、マレーシアの公立マラヤ大学へ交換留学に行ってきました。マレーシアは、東南アジアの中でも急速な経済成長を遂げており、滞在中にもKLCCをはじめとして、その勢いを肌で感じる機会が何度もありました。特に工業分野の発展は素晴らしいとされています。



図1 夜のKLCC



図2 マレーシア国家博物館

今回訪れるマラヤ大学は、マレーシアにおける最初の大学であり、最高学府としても国内外に広く知られる総合大学です。今回のプログラムAOTULEというのは、Asia-Oceania Top University League on Engineeringのショートネームで、工学部の交換留学でした。

2. 大学の生活について

最初に大学に着いたとき、敷地の広さに驚きました。正門から私たちの泊まる寮まで、車で5分もかかります。ここの学生は主にバスを使って通っているそうです。車やバイクを持っている学生さんもたくさんいました。そして、マラヤ大学の敷地内には山もジャングルもあって、ちょうど寮の前の山にモンキーがたくさんいます。最初日の夜の説明会に、モンキーはよく女子寮に出没するので、部屋を出るときにはちゃんと窓とドアを閉めてくださいと言われました。私たちが泊まるcollege 10は国際交流館と呼ばれ、交換留学生在が住む寮でした。プログラム期間中はちょうど大学の夏休みでしたので、交換留学生在はたくさんいましたが、現地の学生はほとんどいませんでした。

一部屋には二段ベッドひとつとシングルベッドひとつの三人部屋でした。とても暑い季節でしたが、扇風機は天井に大きなものがひとつだけ、エアコンは寮がなく、シャワールームもお湯は出ません。現地の人はトイレが終わったら、水で洗うので、トイレトペッパーもありませんでした。更に、洗濯機が壊れて修理中らしく、洗濯はずっと手洗いでした。こういった日本ととても違う生活環境でしたが、これこそが本当のマレーシア人の生活なんだと教わりました。みんなと仲良くなっていくうちに現地での生活にもだんだんと慣れ、ついには日本に戻った後、マラヤ大学の寮のベッドで一番寝やすかったと懐かしく感じました。



図3 私たちの三人部屋



図4 研究室見学



図5 現地の結婚式

滞在中、日程の前半は主に午前中が授業、午後は研究室の見学を行いました。授業は英語でしたが、科学技術者の倫理をテーマとして、授業中の質疑の時間などを通してみんなでいい雰囲気じゃべり仲良くなりました。また、研究室訪問も、私の専門分野とは違ったテーマを扱うところばかりで、とても難しい内容もありましたが、勉強になりました。学生の中には華僑が多くいたので、英語だけでなく、中国語もたくさんしゃべりました。また、非常に勉強熱心であり、これから成長していく国の勢いを強く感じました。

3. 交流

今回の留学プログラムは、現地の大学や日本を始めとして、他にも中国、香港、インドネシア、シンガポール、韓国など、全部で七つの大学からの学生が参加しており、様々なバックグラウンドを持つ人たちとの交流を深めました。滞在中の日程の後半は、バラエティーな活動が多く、マレーシアの文化を知るため、いろいろなところに連れて行ってもらいました。国立博物館、国産自動車会社 Proton の社内見学、マラヤ大学の博物館とジャングル、マラッカなど、毎日楽しんでいました。第一週目の週末は papitusulem というマレーシアの田舎でのホームステイでした。Host parents はとても親切でしたが、英語がほとんど話せず、マレー語だと、インドネシアの人としか会話できなくて、ちょっと寂しかったですが、ご飯も一緒に食べてくれませんでした。昼間に boating で、夜は現地の人々の結婚式に参加し、バーベキューもやりました。そこで体調を崩してしまいましたが、ホームステイ先の人たちやスタッフの人たちが皆優しく、クリニックにも連れて行ってくれておかげでその翌日に体調も良くなりました。マレーシア人のフレンドリーさ、何に対しても笑顔で接するところがとても印象的で、自分自身も物事に対して明るい気分になった気がします。

第二週目の週末には、韓国、日本、インドネシアからの学生 8 人でシンガポールに行き、そこでまたシンガポールの学生さんに親切に案内をしてもらいました。私は中国語、日本語と英語が話せるということのメリットを、このプログラムを通じて、強く思いました。言語が通じないとき、自分の考えていることを人に伝えるのは、とても難しいことだと実感しました。英語をもっと勉強して、アジア圏だけではなく、英語圏の人とでも自由に話せるようになりたいと思います。

4. プログラムを終えて

今回のプログラムを通じて感じたのは、マレーシアという国の勢い、熱気です。街中は活気に溢れ、人々の笑顔は力強く、また、これからの国の将来を背負う学生たちについても、非常に勉強に対してまじめに取り組み、具体的な目標を持った学生が多

くいました。飛び交う言語も、マレー語だけでなく、英語や中国語もよく耳にし、今のグローバル時代において、このような場所からどんどんと世界へと飛び出していくのだなと感動を覚えました。また、何より今回のプログラムを通して、大事な友達も多くできました。このつながりをこれからも大切にしていきたいです。

(以上)